

# ヘミングウェイ生誕百周年について

加藤 薫

いきさつ

一九九九年はちょうどヘミングウェイの生誕百周年に当たり、生国アメリカ合衆国はもとより、ヘミングウェイの生涯と縁の深かったフランスやスペイン、そしてキューバでも盛大に生誕百周年記念行事が実施された。日本でもすでに一九九八年末からヘミングウェイ生誕百周年を記念する行事実施の企画が進行していたが、紆余曲折があつて結局筆者が一九九九年二月に日本国内における記念事業の実行委員長という大役を引き受けることとなり、現在に至っている。本稿はその後の約一年間に及ぶ活動の中で得た新たな知識と筆者のコミットした行事の記録といったものである。

そもそもヘミングウェイはもとより英米文学の世界とも程遠い分野を専門としていた筆者に何故生誕百周年行事のまとめ役の話が持ち込まれたのか、そのいきさつから書き始めたい。起点は日本でのようなヘミングウェイ展を開催したいかという基本方針にあつた。一九九八

年の時点で日本でのヘミングウェイ生誕百周年記念展開催に最も熱心であつたのは、筆者の得た情報に依る限り、在日キューバ大使館であつた。キューバはヘミングウェイの後半生のうち二一年間を過ごし、中編小説「老人と海」を脱稿した地でもあつた。そのキューバ生活の拠点となつた自邸フィнка・ビヒアは現在「ヘミングウェイ博物館」として一部一般公開されている。しかし一九五九年に達成されたキューバ革命以来、アメリカ合衆国政府とキューバ共和国政府の間の政治的対立から国交断絶の時代が四十年近くも続き、小国キューバにおけるヘミングウェイの遺産の存在は、一部の専門家やヘミングウェイ愛好者を除いて段々と忘れ去られていった。日本においてもキューバ時代のヘミングウェイについての活きた情報はほとんど一般大衆には伝わらなかつたと言つていいだろう。

旧ソ連の崩壊以後、新たな経済資源の自力開発を余儀なくされていたキューバは、二重経済というリスクを冒してまでも観光事業開発に力を注いでいるが、ヘミング

ウェイのような国際的に知名度の高い人物の文化遺産を観光の目玉にと考えるのは当然の帰結であり、その意を受けた在日キューバ大使館が積極的にヘミングウェイ生誕百周年を契機にキューバそのもののイメージを日本に浸透させ、九八年当時でまだ年間三千人程度しかいなかったキューバを訪れる日本人観光客の数を増やそうと考えた。(注1)

日本側の受け皿としては長年キューバ関連の出版で実績があり、九八年当時すでに二冊のヘミングウェイ写真資料翻訳出版の企画を進めていた海風書房(注2)がその任にあたることとなり、ここで「キューバ・ヘミングウェイ」の構想がまとまる。あえてキューバ時代のヘミングウェイに焦点を当てた生誕百周年行事なら当然その目玉となるのは移動可能なヘミングウェイ博物館コレクションということになる。ヘミングウェイ博物館には約一万九千点に及ぶ所蔵品があり、その中には約三千点の写真(九九年時点で未整理)も含まれていた。これら写真はサイズも不統一で著作権がキューバ国外の通信社、映画会社に属するものもあり、一部は出版物などを通じて公開されたものもあるが大半はヘミングウェイの死後、遺族からキューバ政府に寄贈されたものの全く死蔵状態にあるものであった。他のコレクションは数量的には書籍、この中には著作初版や限定出版本や世界各地での翻訳出

版物も含まれる、が多くなるがその数が約九千点になる。残りのコレクションがオブジェタイプの所蔵品で、家具、動物剥製、什器、釣り竿や銃など多岐に渡るがどれも一度として国外で展示されたことはない。

筆者は長年ラテンアメリカ美術研究に従事してきた。

キューバ美術・文化行政担当者との交流もあり、ヘミングウェイ博物館についての概要や博物館行政一般についての情報はある程度持っていたが、最初のキューバ訪問時(一九七五年)には修復工事で閉館のため入場することが出来ず、自身の研究課題とも直接関係なかったもので以後記憶の片隅にはあってもあえて調査する必要性を感じていなかった。ヘミングウェイ博物館に初めて足を踏み入れたのはキューバでの学生研修旅行を実施した一九九八年になってのことであった。写真撮影を巡るトラブルから偶然にも現館長のダニロ・M・アルラテ・エルナデス氏と直接話す機会も得、以後副館長でヘミングウェイ研究者でもあるエベリオ・ゴンサレス氏という知己も得、何回かの交信を経て一九九九年一月実施の研究調査には彼らの多大な協力の元に未公開コレクションの一部も見学することが出来た。こういったささやかな実績が海風書房主宰者浜田昭雄氏の耳に入り、在日キューバ大使館前文化参事官ベドロ・モンソン氏(注3)の推薦もあって、これまで門外不出だったヘミングウェイ博物館の写

真と他のコレクションの一部を借り出し、日本で展示するというその唯一の目的達成のために委員長役をおおせつけた、という顛末である。交渉役として、ヘミングウェイ研究に関しては素人ながらキューバの美術文化行政にはやや詳しいからという理由で推挙されたに過ぎないことをここにお断りしておく。

### 主な公式行事

一九九九年二月に正式に「ヘミングウェイ生誕百周年日本委員会」（以下単に「日本委員会」と表記）が発足し、事務局体制やインターネットのホームページ開設も整った時点での最初の仕事は三月のキューバ行きであった。それ以前にすでにスポンサー探しの交渉やマス・メディアへの協力・協賛依頼という慣れない挨拶仕事に疲れ果てていた身には一瞬息抜きのように思えたが、実際には一週間の滞在期間中に一年分の企画の説明とそれらを実行にしかもスムーズに実現させるための事前交渉全てを行うというハードスケジュールだった。平均気温二十六度という常夏のキューバにせつかく来たのにその太陽の恩恵に浴したのはアポイントメント確認電話待ちの三時間だけだった。キューバにおけるヘミングウェイ生誕百周年行事最高責任者は文化大臣アベル・プリエト氏で、日本のヘミングウェイ関連行事は彼の管轄下にある国際

局が担当するため、まず文化省への表敬訪問が優先事項であった。文化省組織の中には別に文化財管理局があり、全国の美術館、博物館を統括している。ヘミングウェイ博物館もこの部局の管轄下であり、従って「日本委員会」の望むヘミングウェイ博物館からの写真他所蔵品の借用には最終責任者であるプリエト氏の承認が必須条件であり、また正式にスタートするヘミングウェイ博物館との直接交渉を容易にする鍵でもあった。

交渉事では最悪の事態を予測してのバックアップを準備しておかねばならない。アイデアとしては、ヘミングウェイにキューバ沿岸での釣りポイントと魚の知識を伝授し、愛船ビラール号でのトロリングには常同行したグレゴリオ・フエンテス氏とその家族に会い、ヘミングウェイ縁の写真や品物がなかどうか、またそれらを借用できないかどうかを確認するものだった。フエンテス氏は九九年当時で百四歳（百五歳説、百二歳説などもある）と齢を重ね足腰は弱っているがまだ健在で、家族と共に漁村コヒマールで悠々自適の生活を送っている。コヒマールはまたピラール号の係留地でやはりヘミングウェイが出入りしたレストラン&バー「ラ・テラサ」があり、ここの壁面一杯にヘミングウェイの写真が展示されていることも確認済みだったので合わせて調査することとした。首都ハバナ中心街からタクシーで約四十分の

距離にあるコヒマールは最近では観光の目玉としてあらゆるガイドブックに紹介され、周辺にはリゾートホテル建設も始まっているが、三月はちょうど観光の端境期に当たり閑散としたものだった。アポイントメントもなくなりなりフエンテス氏の自宅を訪問したが、居間で車椅子に座ってくつろいでいたフエンテス氏は豊饒とした声で笑顔で迎え入れてくれた。事務的な交渉時にはフエンテス氏の孫にあたるネスト・フエンテス氏があたつてくれ、フエンテス氏所蔵のヘミングウェイが使っていたという釣りざおやリール、船舶用具や写真を確認することができた。これまで世界各国から数多のメディア取材者やヘミングウェイ生誕百周年関係者がフエンテス氏の元を訪れたが、直接に所蔵品借用の依頼交渉にきたのは筆者が初めてだとのことで、キューバ政府の許可さえ降りれば貸し出しも構わないとの了解を口頭で得ることが出来た。(注4)

#### △東京国際ブックフェア▽

筆者のキューバ訪問中も日本では、出版物に焦点を絞ったヘミングウェイ・フェア企画を進行させる。「日本委員会」企画の第一弾として九九年四月二二日より二五日までの四日間、東京ビッグサイト東展示ホールで開催された「東京国際ブックフェア'99」にて一ブースを「ヘミ

ングウェイ生誕百年記念コーナー」とし、ヘミングウェイの作品、研究書で通常の書籍流通市場から入手可能な和書、洋書計約三〇タイトルを陳列・販売した。仕入れには(株)八重洲ブックセンターの協力を得た。日本の出版社でヘミングウェイ本の増刷体制に入っていたのは新潮社のみで、小説関係にはあまり新しさが見られなかった一方、ヘミングウェイを素材に新しい切り口からキューバなりヘミングウェイの小説を語る試みの出版物や写真集がかなりあったことに気付いたのは収穫であった。考えて見れば、高校での受験対策教材や大学での英文購読テキストとして言わば強制的に読まされただけのヘミングウェイ作品との付き合いだったが、ここに来て初めて自分の意志で数冊買い求めた。展示ブースではこの他に「パパ・ヘミングウェイ・Tシャツ」やシエラ・マエストラ・コーヒーなどキューバ特産品も合わせて試験的に販売した。またヘミングウェイ最後の未刊行作品“True at First Light”(邦題「ケニア」)が翻訳進行中との宣伝もあった。四日間の売り上げ総額は約一七万円。決して赤字ではないのだが費用対効果比を考慮すればまだブームを作るといには程遠い数字であった。またブックフェアといいながらも数量的に最も売れたのが廉価なコーヒー豆パックだったというのも皮肉ではあった。

## ハ八重洲ブックセンター・ヘミングウェイ写真展V

六月二六日から七月三日にかけて東京駅前八重洲ブックセンター7階特設会場にてヘミングウェイの写真展を開催する。目玉に予定していたヘミングウェイ博物館所蔵の未公開写真がキューバの官僚権威主義のおかげで届かず、すでに完成していた海風書房出版の「キューバのヘミングウェイ」（シロ・ビアンチ・ロス著、後藤雄介訳）、及び「写真集 アーネスト・ヘミングウェイ」（クラウディオ・イスキエルド・フンシア著、大林文彦訳）で使用权を獲得していた（オリジナルの出所は全てヘミングウェイ博物館）白黒写真、及び筆者他のカラー写真をパネル張りした総計五十余点を陳列した。幸いにも会場サイズ一杯となり、キューバ時代のヘミングウェイの実像を語る画期的な写真展となった。一般論としては前例のない事を実施するに官僚は極めて臆病だが、これにラテンアメリカ特有の権威主義が加わり最悪の事態となったわけである。しかし危機管理対策としてあらかじめ最悪のケース発生時への対応策は考えておいたので支障はなかった。写真校正からパネル張りまでは（株）コニカのラボ技術スタッフの方々の支援をいただき感謝している。

初日には翻訳家高見浩氏の講演会や、期間中はアイマックス仕様（大型七〇ミリ立体映画）の新作映画「老人と

海 ヘミングウェイ・ポートレイト」（アレキサンダー・

ペドロフ監督、IMAGICA、NHKエンタープライズ、電通テック製作、七月三日より東京アイマックス・シアター上映）の前宣伝といったイベントで盛況だった。七月二日がヘミングウェイの命日にあたり、また七月二日が生誕日ということで、世界各地でのヘミングウェイ生誕百周年行事も七月に実施された所が多かったが、無事その先鞭を切ることができた。またヘミングウェイの略歴や書籍リストを掲載した公式カタログ（注）も完成しこれは無料で配布した。

マス・メディアでは東京新聞がキューバ文化とヘミングウェイ展に関する特集を組んでくれたのを始め、朝日新聞、毎日新聞など全国紙に写真展案内記事が掲載された。また子供向けの少年写真新聞でも特集記事が掲載される。

## ハ七タサルサ・カーニバルV

大学が平塚市にあることや、筆者が平塚市「七夕を創る会」のメンバーであることから、「日本委員会」から多くの観光客であふれる七夕まつり期間に合わせて、平塚市でのヘミングウェイ写真展開催の要望があった。しかし会場日程、場所の折り合いがつかず、かろうじて九月に平塚駅ステーションビル（ラスカ）のホール会場を

確保できた。しかしラスカ側の協賛にもかかわらず写真展開催最低費用の約八〇万円のみが立たず、結局二〇〇〇年春まで延期となった。

一方、同時平行で学生中心に企画を進めていたサルサカーニバル事業の方は作業が進み、平塚地元のスポンサー社の協賛、米沢楽器店のPA装置設置から操作の協力を得ることが出来た。カーニバルの主旨はヘミングウェイの愛した伝説のダイキリ・カクテルの変種「パパ・ドブレ」とサルサ音楽を広く一般に提供する試みだった。音楽の方では日本のサルサ業界では定評のある「ウノ企画」と組み、「スピード」や「キコロ」などの音楽タレントを輩出させている「沖縄アクターズ・スクール」の系列にある「アクターズ・インタナショナル」とのジョイントで、新しい七夕のイメージソング「夏空の星」(作詩作曲…志村享子、編曲…森村献、プロデュース…チカ・ブーン)と新人グループ「アグア」及びバックのダンシングチームをデビューさせた。学生独自の音楽企画ではこの他に「熱帯音楽市場 魅惑の東京サロン」、「ウォーター・クロック」、「ガーネ」、「DJアイク」などのステージを実現させた。特に「熱帯音楽市場 魅惑の東京サロン」公演への注目度が高く、印象的だった。何十回もレシピーを変えて完成させたフラッペ・タイプラム酒カクテル「パパ・ドブレ」も大好評だったが、出店し

たラスカ・ビルの「ウッド・デッキ」という空間自体に対する一般の人々の認知度が低かったことや駅改札口からの人の流れをうまく捕らえることが出来ず、赤字となった。キューバ大使メレンデス夫妻や新文化参事官ガレゴ夫妻の訪問もありカーニバル自体は盛り上がったが、カーニバル全体では七〇万円の赤字であった。別会場「ふれあいの広場」では(学法)宮澤学園の協賛で東京からメキシコ料理店「ドン・ブランコ」、キューバ料理店「ボデギータ」の料理出張販売、それにキューバの物を産を並べラテンアメリカ・カリブの雰囲気味わってもらおうとしたが、場所の使用条件に制約があったため十分な活動ができず結局こちらも総額三〇万円程の赤字を計上した。

#### ハヘミングウェイ生誕百周年記念コンサート

七月二八日に東京新宿区にある労音ホールでキューバから招聘した若手バンド「ニウルカ・イ・ス・グループ」の公演を実施した。キューバというとサルサ音楽というものですが頭に浮かぶが、このグループの新しさはキューバではサルサ以前から存在するソン音楽を継承すると同時に他のカリブ海諸島の音楽リズムなどを取り入れた、いわゆる汎カリブ・サウンドという新ジャンルを創造しようとしている点にあった。メンバーはISA(注6)の

教員と大学院レベルの学生で構成され、音楽的には知的で表現は情熱的という従来のキューバ現代ポピュラー音楽のイメージを大きく変えるものだった。日本での知名度がまだ低いことやこれ以上赤字を出せないという事務局の判断で会場は定員三百人規模の小さなものだった。幸いにも満席となり、ビールやラム酒のサービスもあったせい以後半になると聴衆の半分がステージ回りで踊り出すという、いかにもキューバ的な雰囲気あふれる楽しい公演だった。ニウルカのグループはこの後、労音のマネージメントで姫路、大阪での公演を果たし、八月初旬まで日本に滞在した。駐日キューバ大使館が日本でのヘミングウェイ展のためにと本国政府に対して強力に要請したため実現したコンサートであった。

#### △紀伊國屋ヘミングウェイ関連図書目録▽

筆者の依頼で紀伊國屋書店が独自に編集した「ヘミングウェイ関連図書目録」が八月初旬に出版配布された。この目録は九九年に製作されたヘミングウェイ関連図書目録としては最も完成度の高いもので、第一部・洋書、第二部・和書に大きく分かれる。第一部は言語別に英語の小説原書、英語のヘミングウェイ研究書及び関連書、フランス語による訳書及び関連書、ドイツ語による訳書及び関連書、米国におけるヘミングウェイ関連学位論文、

複写サービスのある絶版本、それにヘミングウェイ研究雑誌、マイクロフィルムまでも網羅している。第二部では九九年上半期までに出版された（絶版本も含めて）ヘミングウェイ作品訳書、研究書及び関連書を挙げている。さらに付録としてヘミングウェイ作品映画情報も添付されている。この目録が完成しただけでも「日本委員会」委員長の役割が果たせたような気がした。橋渡し役を努めてくれた平塚キャンパス担当の岡田智氏はじめ編集作業に従事された紀伊國屋のスタッフの方々に深く感謝する。

和書の頁をめくっていると、改めて日本におけるヘミングウェイ人気の高さというものが伝わってくる。日米同時出版の最新刊「ケニア」（注7）でヘミングウェイの全作品が日本語に翻訳されたことになるが、一九六二年の死亡後、七〇年代末までに出版されたいわゆる文学全集ものには必ずといっていい程ヘミングウェイ作品が収録されている。八〇年代に入ると文学全集出版の衰退という現象の余波を受けて、単行本スタイルでの短編集出版などが主流となる。また同時にテキストそのものよりもテキスト解釈本出版の比率が高くなってきているように、この傾向が九九年まで続く。またより多角的に人間ヘミングウェイを語るような写真集、家族による伝記、愛の遍歴、料理の好み、などの出版物も増えており脱テ

クスト化の傾向も顕著である。ヘミングウェイ研究関連書を研究することによって文学のテクストを巡る文学論の変遷というものを概観出来そうだ。

### △恵比寿三越ヘミングウェイ写真展▽

十月二二日より三一日まで東京恵比寿ガーデンプレイスにある三越デパート二階イベントスペースで写真展を開催する。開催の一週間前にはキューバより文化大臣アベル・プリエト氏の来日もあり雰囲気は盛り上がった。八重洲ブックセンターでの写真展では、表装したにもかかわらず展示スペースと内容の関係で展示できなかった写真に加え、念願だったヘミングウェイ博物館所蔵で世界初公開という写真オリジナル一二点も事前に届いており、このうち九点を実際に展示し、充実した内容となった。また会期中日にはヘミングウェイ博物館副館長エベリオ・ゴンサレス氏による約二時間に渡る講演会も、通訳星野弥生氏の絶妙なスペイン語逐次通訳の助けで、予定した三十人分の椅子が大幅に足りなくなる程の盛況となった。観客も、若い頃にヘミングウェイを体験した年配の方だけでなく、初めてヘミングウェイの名を聞いたというような十代後半から二十代前半の若者が多くなり、改めてロケーションの重要さを痛感した次第である。写真展二日目には毎日新聞、日本経済新聞に取材記事が写

真入りで掲載され、パブリシティの点でもうまかった。書籍やヘミングウェイ関連グッズの売り上げ総額も高く、ようやく肩の荷が降りた感じであった。関連グッズの中では貝原浩氏の手描き彩色イラスト葉書セットの評判がよかったようだ。

この写真展は終了後、パッケージで十一月に九州小倉市いづつ屋デパート特設会場、十二月に静岡県浜松市さかなやギャラリーを巡回したがそれぞれに強烈なインパクトを与えたようである。

ここまでの一九九九年におけるヘミングウェイ生誕百周年主要行事の報告である。「日本委員会」も年末をもって解散という算段だったが、衆知度が上がったせいから「日本委員会」事務局には新規大型企画の依頼も複数舞い込み、二〇〇〇年五月までの延長となった。最後に書評というにはおこがましいが、この一年間に目を通したヘミングウェイ研究書の中で印象的だった作品を順不同で幾つか拾ってみる。

1. 「ヘミングウェイ美食の冒険」(クレイグ・ボレス著、野間けい子訳、(株)アスキー発行、一九九九年)  
ヘミングウェイの作品に登場する料理と酒に関するリファレンス本としてはすでにサミュエル・J・ローガルが「For Whom the Dinner Bell Tolls (誰がために



デイナーの鐘はなる」なる本(注8)を一九九七年に上程している。両著に共通するのは、おそらく本書の冒頭に引用されているヘミングウェイの生き方に共鳴していることだろう。

「ロマンスというのがすっかり姿を消してから、

私は料理にロマンスがあることに気がついた。

胃が元気なうちは、私はロマンスを追い求める」

(注9)

こういう言葉を発するヘミングウェイに対してピーター・グリフィンは、「アーネストには、生きる意欲は健全な食欲なくしては成り立たないと人に思わせる才能があった」と評している。(注10)

小説や映画といった芸術を観賞する喜びのひとつに感情移入というものがある。芸術とは全てフィクションであるが、実生活では体験したくてもできなかった別の人生をつかの間過ごす楽しみ、あるいは自分の遭遇した人生の一シーンを洗練された形でリフレインする楽しみがある。文学ならば文字から様々なイメージが産みだされ、自分の言葉では表現できなかった、あるいは抑圧されていた意識下のパトス群が解放されるというカタルシス効果もあるだろう。いずれの場合も鑑賞者はヒーローやヒロイン、あるいは脇役の一人にでも感情移入して彼らに一時なり代わる、あるいは素材やモチーフを提供する作

者に感情移入する場合もある。作者の側は文体としてそういった鑑賞者の感情移入を許さない、あるいは拒否する場合もあるが、そういった作者のスタンスや考えにまた鑑賞者が感情移入する。この種の楽しみをさらに悦楽の世界に導くのが食事や料理、酒の場面であることはほぼ疑いなく、小説の主人公や作者自身の人生のレシピーの表象として個々の料理法に興味が向くのは必然である。本書はさらに読者には実際にレシピーを参考に料理することを薦めていて、普段は台所に立たないような男女にもわかりやすく手順や食材の調達方法まで書いている(専業主婦向け料理本には不親切なものが多い)。幼少時代のアメリカ合州国、青年時代のイタリア、フランス、スペイン、結婚後のキウウエスト、アフリカ、キューバ、とほぼヘミングウェイの活動舞台順に、それぞれの時期で重要だった作品や実生活に登場する料理を紹介している。キューバについてだけ言えば著者(あるいは訳者の問題か?原文は入手していない)は実際にキューバまで行っていないらしく、細かい表現のニュアンスの問題以上に疑問となる点が見受けられた。但し、ヘミングウェイの生きていた時代と現在ではキューバの食生活も大きく変わっているし、筆者もキューバ料理の台所事情に精通しているというわけでもないのでこの推測も誤っている可能性はある。その点変化が少ないのは酒で、ワイ

ンの章と各種カクテルの章が独立して掲載されているし、一番安心して読める個所だったのだが、著者には一番筆の奮いようようがなかった章かも知れない。最終章の食後の楽しみとして短編「善良なライオンの寓話」（雑誌『ホリデイ』一九五一年三月号初出）を掲載しているが、主人公の善良なライオンの帰属する場所がスペイン語と英語がちゃんぽんに使われるなじみのバーで、著者も推測するようにヘミングウェイの精神とキューバとの関係が明らかにされているのが印象に残る。

## 2. 「ヘミングウェイ 愛と女性の世界」（日下洋右著、彩流社、一九九四年）

買いそびれていたヘミングウェイ研究書のひとつであった。ヘミングウェイは私生活では三度離婚し、四回結婚している。また父権の象徴のような「パパ」を自称し、他人にそう呼ばれるのを好んだ。はしがきにあるように「ヘミングウェイは戦争、狩猟、闘牛、釣りなどの男性的な世界を好んで描く作家であるという見方が定着しており、「読者もまた雄々しい側面を何の疑問もなく受け入れる傾向が強い。」（注11）しかし著者が後書きでまともめているように、ヘミングウェイが男性性を誇張するのは実は、母性愛に恵まれなかったことや幼少時は女の子として育てられた事、父親が母親の尻に敷かれていたこ

となどに対する不満の裏返し表現であり、華麗に見える女性遍歴も実態は女性と円滑な関係をむすぶことが出来なかった事情があると指摘している。七〇年代からヘミングウェイの女性像に焦点をしばった論文を書き進めてきた著者の業績の集大成であり、本書出版以前の類書はみあたらないようだ。今でこそフェミニズム的視点からのヘミングウェイ分析はアメリカ合州国でも頻繁に出ているが、フェミニズムとは一步距離を置いているにせよヘミングウェイの生涯と作品の新しい読み方（の楽しさ）を示唆する一書となっている。

## 3. 「アーネスト・ヘミングウェイ」（クラウディオ・イスキエルド・フンシア著、大林文彦訳、海風書房、一九九九年）

原著は一九九五年に“Un personaje llamado Hemingway（ヘミングウェイという人物）”として刊行されたもの。写真はヘミングウェイ博物館所蔵のものに加え、写真家フリポリオ・ノバル、フランコ・アバタネオ撮影のものを加え、キューバ時代のヘミングウェイを中心としたフォト・ドキュメンタリーになっている。フォト・エッセイとして綴られた原文は固いスペイン語の美文調になっていたのですのままで日本の読者にはカビ臭い感じになってしまうのではと思っていたが、訳

者の力量でかなりこなれたものとなっている。ソフト・カバ―の表紙で重さも手ごろ、見て楽しめる体裁になっているのだが、著者のテーマは重く、ヘミングウェイの「孤独」である。著者は前書き代わりに巻頭に書いた「追憶」の頁で、「私は、ヘミングウェイの数多くの写真を見直し、それらすべてのなかに……（中略）……善意を見出した。しかし、ただの一枚も愛情は見出せなかった」（注12）と述べており、彼の孤独さを示すエピソードを紹介している。そしてその孤独さに気付き、それでもなお愛情を注いだ最後の妻メアリーの存在の大きさにも言及している。確かに収録された写真はどれもヘミングウェイの「生涯の輝かしい瞬間」（注13）を示しているのだが、最も幸福そうに見えるスナップでさえも、ヘミングウェイの心の内は閉ざされた孤独な状況を顕在させている。ヘミングウェイ研究にはまだ空白の領域があり、そのようなことを予感させる一書だろう。

#### 4. 「ヘミングウェイのスーツケース」（マクドナルド・ハリス著、國重純二訳、新潮文庫、一九九九年）

新潮社から一九九一年に同タイトルで刊行された著作の文庫本化である。英文原著は一九九〇年に出版されているが著者ハリスは一九九三年に逝去している。人気の大衆作家であると同時にカリフォルニア大学アーヴィン

校で英文学や比較文学を講じる教師でもあった。筆者の世代だと「気球乗り（The Balloonist）」（一九七七年）が一番なじみのある著作であろう。いわゆるエンターテインメント本で結論を一度知った上での再読だったから、必然的に細部の仕掛けに注目して読むこととなったのが今回本書の面白さがようやくわかったというのが本音である。

ヘミングウェイはカナダ、トロントの新聞社特派員としてパリ駐在中の一九二二年クリスマス直前に、最初の妻でピアニストでもあったエリザベス・ハドレー・リチャードソンとローザンヌに向かう途中、待ち合わせたリヨン駅でヘミングウェイのそれまでに書き溜めた短編原稿の入ったスーツケースを盗まれるという事件があった。そのスーツケースと中の原稿が見つかり、別人の名前で編集出版するという話が発端となる。ここから遺族の著作権の問題、「本物と贋物」という芸術の古くて新しい問題を謎解きの要素を絡めて展開してゆく。父親としてのヘミングウェイと息子達の関係の再現であるような主人公であるニルス・フレデリック・グラスと息子のアラン父子の描き方、作家ヘミングウェイの創作の現場を再現したような筆写場面といった著者の想像力には引き込まれるものがあった。今回再読して始めて気がついたのは、訳者があとがきで述べているようにアメリカ人なる

もののアイデンティティーを扱っていた点である。さらには小説は現実を追い越せるか、あるいは小説はもはや日進月歩の現実に追いつけず、過去のパステーションに活路をみいだすだけなのか、フィクションとしての小説形式（訳者あとがきの言葉では「冗談」をこの小説形式のキーワードとしているが、「冗談」という言葉は著者巻頭辞『今のは冗談さ』を引用している）を巡る文学談議を仕掛けている点も見逃せない要素だ。しかしそんな堅苦しい論議を抜きにしてエンターテインメントとして楽しむのがよい稀書である。

5. 「ヘミングウェイはなぜ死んだか」[老人と海]の伝説 二十世紀の文豪の謎（柴山哲也著、集英社文庫、一九九九年）

本書は一九九四年朝日ソノラマ刊行「ヘミングウェイはなぜ死んだか」を文庫本化したもので、刊行後にアメリカの情報公開法で明らかになったキューバ危機関連データをふまえての加筆、訂正をおこなったものである。朝日ソノラマ版を読んでいなかった筆者には実質初めて接する書籍であった。プロローグの前半は明らかに文庫本化にあたって加筆されたものだが、改めて二〇世紀における「革命」の意味から問い正している。著者は六〇年代前半に立て続けに起こったヘミングウェイの自殺（一

九六一年…公式発表ではあくまで事故扱い）、マリリン・モンローの自殺（一九六二年…これは逆に他殺説が浮上している）、そしてジョン・F・ケネディの暗殺（一九六三年）、といった唐突な死に、古き良き時代のアメリカの終焉を感じ取り、さらにこの三人の死の背後にキューバ問題があったとの仮説から本書を書き進めている。つまり「ヘミングウェイの自殺は、単に文学的な事件にすぎなかったのだろうか」(注14)という疑問から発し、「ヘミングウェイにあつては、世に言う作品研究だけが問題ではないのだ」(注15)としている。となるとビル・グレンジャー著「ヘミングウェイ・ノート」(加藤洋子訳、集英社文庫、一九九〇年)でグレンジャーがあくまでフィクションの形で顕在化しようとしたヘミングウェイの死の謎を、柴山氏はノン・フィクションの形で明らかにしようというものになる。残念ながら筆者にはこの本で参照されているデータ全般を検証できる能力はないのだが、まず本書がただの伝記でないことに興味を覚えた。

つまりヘミングウェイの生前の活動から死までの行跡に、二〇世紀前半の政治と個人の精神生活とのかかわり方の一類型を見出すことがテーマとなっている。アメリカ政府機関であるFBIとの関係でキューバ滞在中のヘミングウェイが果たした役割を明らかにする中で、文学

者としての内面の軌跡と、ある特定の時代に生きる人間

注釈

(注1)

としての実践的社會活動の意味を膨大な資料の中から解説しようとしている。著者は新聞ジャーナリズムの出身者で長年日本型マス・メディアの特質と限界というものを明らかにしようとしてきた。本書も日米のマス・メディア比較や情報公開度の比較などを随時おこなっている。

(注2)

また一九四〇年生まれである著者の六〇年代体験も反映した時代論、日米関係論も展開している。従って表紙タイトルに魅かれて本書を手にした読者の中には、結論に達するまでの回りくどさや、どうしてこんなエピソードがここに入っているのか、といった仕掛けの見えにくさに辟易する人もいるだろう。あとがきで著者は「六〇年代へミングウェイのアメリカ、そのアメリカの断面の定點観測は、私のテーマに格好の方法を与えてくれた・・・」(注16)と述べている。思わせ振りのジャーナリストくさいタイトルや見出しの「くささ」ともあいまって、本書に対する著者の思い入れが逆に本書の魅力的なテーマから読者を遠ざけているのが残念に思える。

以上。

(注4)

社会主義国キューバでは私有財産の認められている範囲は狭い。ただキューバ革命以前からの資産については明確な基準を持って制限法規が適用されているわけではない。所有しているかぎり問題が発生することはないが、国外持ち出しということになると国家資産登

(注3)

Lic. Sr. Pedro Monson. 九九年に本国に帰国し、現職は文化省国際局長兼国際文化交流事業部長。

一九九七年にキューバを観光ビザで訪問した日本人数は約千五百人。九九年は十一月現在ですでに一万人を越えていた。(在日キューバ大使館領事部担当者談。)

海風書房(東京都中央区東日本橋1-3-9)

はこれまでも、H・アルメンドロス著、神

尾朱美訳「椰子より高く正義をかがげよホ

セ・マルティの思想と生涯」、カルメン・R・

アルフォンソ・H著、神代修訳「キューバ・

ガイド キューバを知るための100のQ&

A」、オスバルド・サラス／ロベルト・サラ

ス著写真集「エルネスト・チェ・ゲバラ」、

等の出版実績がある。

録、文化財移転の問題、有料貸し出しの場合の料金設定や利益配分、責任の所在など数限りない問題を官僚は見つけてくる。結局ヘミングウェイ博物館所蔵品貸し出し交渉がまとまったのでフェンテス家との実交渉には至らなかった。

- (注5) 正式タイトルは「アーネスト・ヘミングウェイ生誕100年記念ヘミングウェイ写真展〜老人と海〜キューバの日々」。巻頭辞に筆者寄稿。

- (注6) Instituto Superior de Arte (高等芸術院)の略称。日本で言う芸術系大学院大学で美術の他、演劇、音楽、映画などの学部を持つ。
- (注7) 「ケニア」(金原瑞人訳、アーティストハウス、一九九九年)英文タイトルは“True at First Light”でヘミングウェイ本人が実名で主人公として登場。但し遺稿編纂は遺族の手によるもの。

- (注8) Rogal, Samuel, J., For Whom the Dinner Bell Tolls, Bethesda, International Scholars Publications, 1997.

- (注9) Boreh, Greig, The Hemingway Cookbook, 1998, 邦訳「ヘミングウェイ 美食の冒険」

野間けい子訳、アスキー出版、一九九九年、巻頭引用より。

- (注10) 同上書、イントロダクション：野性的な美食の冒険、文頭引用より。原文は Griffin, Peter, Less than a Treason, New York, Oxford University Press, 1990.

- (注11) 日下右著「ヘミングウェイ 愛と女性の世界」、彩流社、一九九四年、一頁。

- (注12) Izquierdo Funcia, Claudio, Un personaje llamado Hemingway, Ediciones Mec-Graphic Ltd., 1995, 邦訳「写真集 アーネスト・ヘミングウェイ」、大林文彦訳、海風書房、一九九九年、六頁。

- (注13) 同上書、七頁。

- (注14) 柴山哲也著「ヘミングウェイはなぜ死んだか『老人と海』の伝説 二十世紀の文豪の謎」、集英社文庫、一九九九年、十五頁。

- (注15) 同上書、十六頁。

- (注16) 同上書、二二二頁。